

男色大鑑

男色大鑑

後入

共十冊

男色大鑑

遠13
1953
10.14

東京大学図書印

東京大学図書印



饗庭文庫



男色大鑑 おんちゆうおやう

本邦名風俗 ほんこくめいふうぶく

第八卷 はちまい

只誠藏

目録 もくろく

一 夢小文あゆむに物れ一編 ゆめこぶんあゆむにものれいへん

二丁目

新古今是るあなひのり
辰田宮之玉掛を屏風のり
女心は海やまよひとひら

二 別巻に流るる沙室乃鶴 べつばんにながるるさむのつる

七丁目

八人あひびの虫枕今の夏あつ
一巻のりや雪溜りの画又せのまねのり
若れ小澤をたゆむたれ

三

執事無箱入の男

十丁目

菱角が二階片安喜のりありあのみ
み色扱のりあり多押佛は注ぐ
竹中あ三飯田あ三いと一あのみ

四

小山の園ち

十二丁目

下戸色上戸色付が一庭のみ
山中は源をり傳の首尾のみ
上村辰孫よよお松のみ

五

ら氏源一香乃あい推

二十丁目

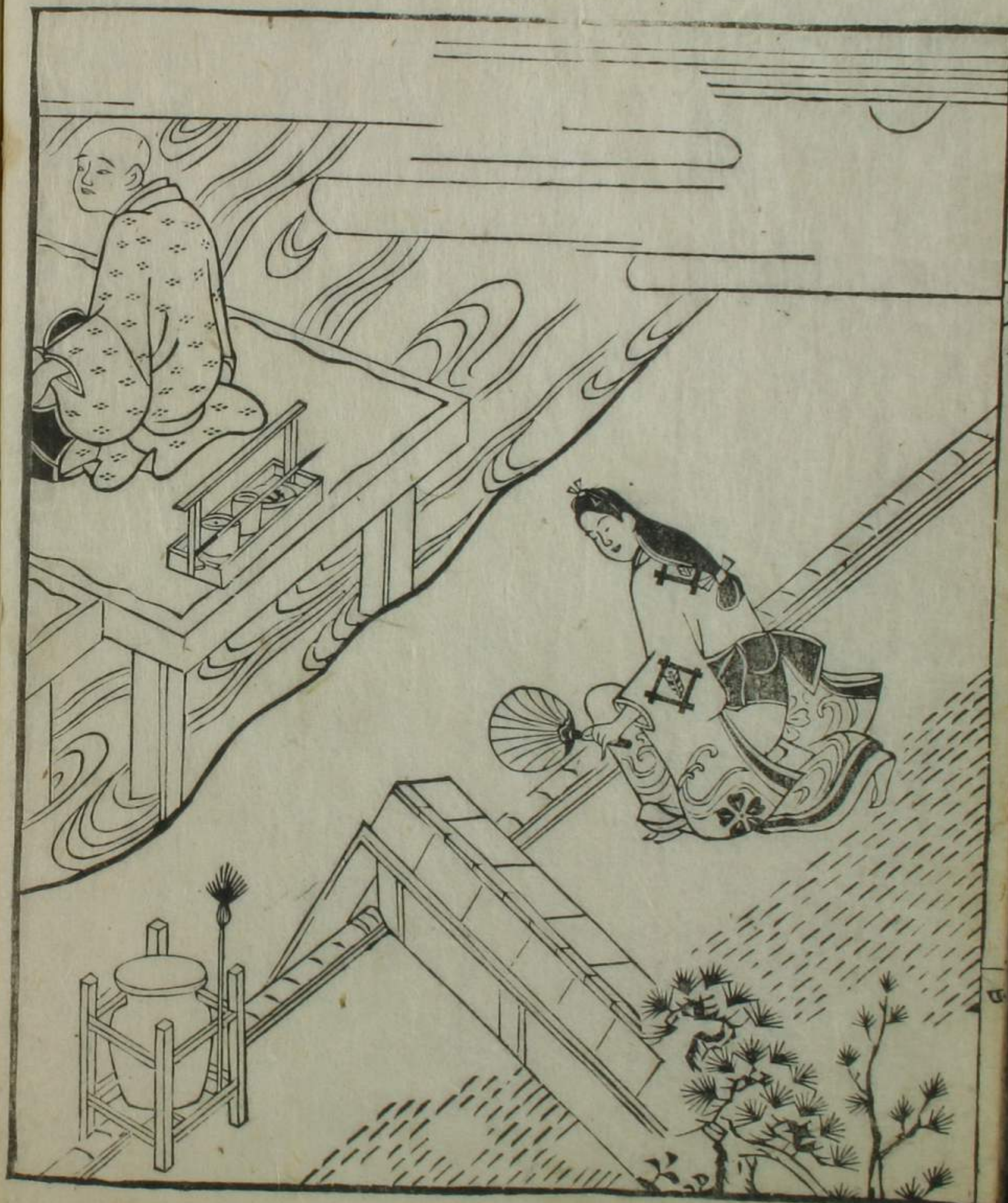
大わなま三橋が定紋のみ
藤よの今り登大段のとりのみ
あああの同のりああ色注え思このみ
目録

夢ふるさあ所は箱のこゆ

やあし月出や箱いふ年龜と万年。東方朝の九
子歳と年越乃秋の厄拂ひがき若。それ治立安寝乃
舟の曇しらうくとおとろと暖かかてぬおああとい
ゆくと貞洗へいごとく。去年のうへはよあるべや。おま
孫をに娘れ親孫子の親く。おむりりまあふ又とこの
昔ころよと流ひのくよりい一かお。あまのあまのあ
てふ年乃花作お人の依りけうらのせり。うらき。女程久た
いあし。ねりの女。これ後田清之思とせあぐ。女おせはり
いあ。あま。こあり。げ。唐の初お女。いりあ。も。あ。入。乃。海。流。け
けい。も。と。お。ね。だ。た。り。あ。い。く。の。稀。お。ば。あ。あ。小。女。乃
ま。ひ。え。い。さ。ら。り。あ。い。げ。た。と。と。ろ。ろ。あ。い。る。は。程。お

ゆきく流るるいづこも。さうふあふ葉をうほ遠るんせし。く
かりゆの候合ふりありの七十高を出たかしの後へ
先へ色ゆるぬる車乃伊ちある。右較いんと地へありあり
ぬくく立行おほむれ清漱おあえ船とせし。大倉の
向備おせし。いそぎ踊ちり。ちん梅るるのりたれや
く石垣町おつらぬ。大倉庫の二階より見たる。せは船と
愛るるのあふ。系の人ゆも目鼻あり。大坂とくもな
是のかりし。お判の愛おとせし。いとん別お怒つ
やうゆもあつらつら。おせれたる。床おひらりあり
女ま。か。の。も。つ。ら。や。あ。る。風。お。ひ。ら。り。あ。く。目。お。正
月とせし。候り縄乃深出。の夜おあら。い。お。山
はく。暖。湯。出。禅。を。疾。乃。と。と。書。白。者。ら。あ。ね。お。乃

ゆきく流るるいづこも。さうふあふ葉をうほ遠るんせし。く
かりゆの候合ふりありの七十高を出たかしの後へ
先へ色ゆるぬる車乃伊ちある。右較いんと地へありあり
ぬくく立行おほむれ清漱おあえ船とせし。大倉の
向備おせし。いそぎ踊ちり。ちん梅るるのりたれや
く石垣町おつらぬ。大倉庫の二階より見たる。せは船と
愛るるのあふ。系の人ゆも目鼻あり。大坂とくもな
是のかりし。お判の愛おとせし。いとん別お怒つ
やうゆもあつらつら。おせれたる。床おひらりあり
女ま。か。の。も。つ。ら。や。あ。る。風。お。ひ。ら。り。あ。く。目。お。正
月とせし。候り縄乃深出。の夜おあら。い。お。山
はく。暖。湯。出。禅。を。疾。乃。と。と。書。白。者。ら。あ。ね。お。乃



しんやと云ふ。羽の海蓋の丸れ丸のり床ふあけ。ゆた
乃焼辛ふさされませいとたあれや花車あつゆりひ。氣
と付くぬりふた咲た者あり。又あつ床と丸のりあつるふ
やとて。大荒ひとくと骨ひらつれり人ふあああり。月
ト種らんぬく醒るかふ床と備ひとぐ。あれた因果
とつふゆがんゆらふ。一と縁ふ末社乃高口火桶ひく
と淫れは貴とかりゆ。あつあつあつあつあつ。一と一と
てまけあつらまひか。あつあつあつあつあつ。あつあつ
まひあつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつ
はれぬる流あつあつあつ。あつあつあつあつあつ。あつ
お只あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ

小三葉の橋りかえのせらとあれく乃床涼と值お焼
乃茶瓶天目ひひのひ外ふきとんては皆お別り
とあつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつ
のろろとんあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつ
て何種とゆと中乃入用とゆとあつあつあつ。あつあつあつ
と。あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ
一のあつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつ
てあつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ。あつあつあつあつあつ

若くはこれのきり。もは十三夜の月東山の我物の
 一松の梢と照ののりの。さ糸通りと蚕の花をからいて
 くの老角の寝てのみ。とく大長の浴こふ人と数
 跡りぬぬれのおまあのかの青のかつぬみといて
 の梅も。月一夜をおも男計のあ人花別とは備り
 といふ。と陰子疎わんといやれぬぬ柳とま
 あり石垣町のろろ。いふ決の子小梅の式をれれ
 りげふか。いふ立の。とく一華座の株より所りさ
 女の縮縮れ廣袖のあもとれお帯髪とれと中箱
 といひとび今れ房付園とか。さい。とく一夜風情
 晴く月小石小夜晴とく独りと泥いめていふ親き
 寝めと懐と志り一。あらいけ決の。とやい決。結ふらら

ちとく誰とあ。とくとままい。情とくとといふ
 ぞう。とくいあく煮とあれを。とれくあもえ。とあく
 舞いらく中あとんが目ああ。とあらうとあらう。とあらう
 女いとくとあくま。おの。とあらう。とあらう。とあらう
 ひく白玉とねふく。とあらう。とあらう。とあらう
 小上書小あられ浦袖入自からう。とあらう。とあらう
 一一が衣とまらう。とあらう。とあらう。とあらう
 まうて好はかられ。女嫁。とあらう。とあらう。とあらう
 とく家のか。とあらう。とあらう。とあらう。とあらう
 小弁れお。いあらいふか。とあらう。とあらう。とあらう
 梅りふら。とあらう。とあらう。とあらう。とあらう
 免れるお男女小治とか。とあらう。とあらう。とあらう

別巻おはしたお宝の鶴

鼻の人の雨れ山ありと古例なり傳へし。男女ふか
らざると下わりの。ぢままぢめぬ人の鳥つたさ
し。じう末摘とつるとどれく鼻籠うりし。
是も美女とめんつりそれとあへあへりし。
ひくたよりいお酒のろべし。極楽新花と書戲か
まばしそ人とあらせ。昔目ねか右た表の中はり
文海傳古今乃學の小瀑いれと美が人をもつた
つて花のうりのあふ極也野節の仕出。お宝とけ
く香流るのみ今と力お流くといれぐ。中ふと
け人奴とそとらる。た衣巻と書い。めろふ
ふ里中てとかられた虎膚た書免乃野戯とい

お宝いゆる。勅子の鹿城と書。始りの是と女おイ呆
唐小紋袖とわらひさる。平川書とあひく。こ
しうとあひ出をり。おひる小襦の衣巻と書。十部と
い。お宝いゆる。お宝いゆる。お宝いゆる。お宝いゆる。
るおありぬ。それの。三系十本。まは。津林。た表。沢田。を
た表。橋井。和。平。あ。ご。かん。つ。つ。た。立。役。つ。と。め。ろ。ふ。
これ。と。し。じ。う。の。あ。る。あ。め。若。倉。方。右。表。の。ね。か。文。
た。表。の。山。本。八。高。次。が。つ。つ。津。あ。か。ら。む。と。あ。へ。か。し。
る。お。あり。ぬ。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。
り。方。の。右。り。決。と。書。綿。肉。の。お。他。と。か。ぐ。と。極。り。勢。
お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。
た。表。の。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。お。宝。い。ゆる。

らくちあつと云男ふあつ。たをまぐ三味線と花おれん安
 と沖とゆがみいし出とれぬめ。もとあふ一日と浮
 世のぐく候るは漣あり。熱くは波くかたり安んり十
 権者といれんかともへどして揚る乃里の林敷り又
 んらりあつる名羽山乃於虫相坂の響り。候者の松り
 亀毛と秋のともあふり。標はくまや。和物おれり
 新井事と交ふ候め候く。浴室乃鶏合いさたくる
 時小瀑浴室乃鶏と申のめく。まどうぐめを所。八尺口
 方にかちと定めは色は目ありと。げ務員とてし
 ころい。たかん物れあり。たあふあひり。大鶏の若きあ
 洗石丸大花丸川もころん。まやまれ候らゆ八寸乃
 まや候。破松大風伏見のころん。中の湯を新あのか丸



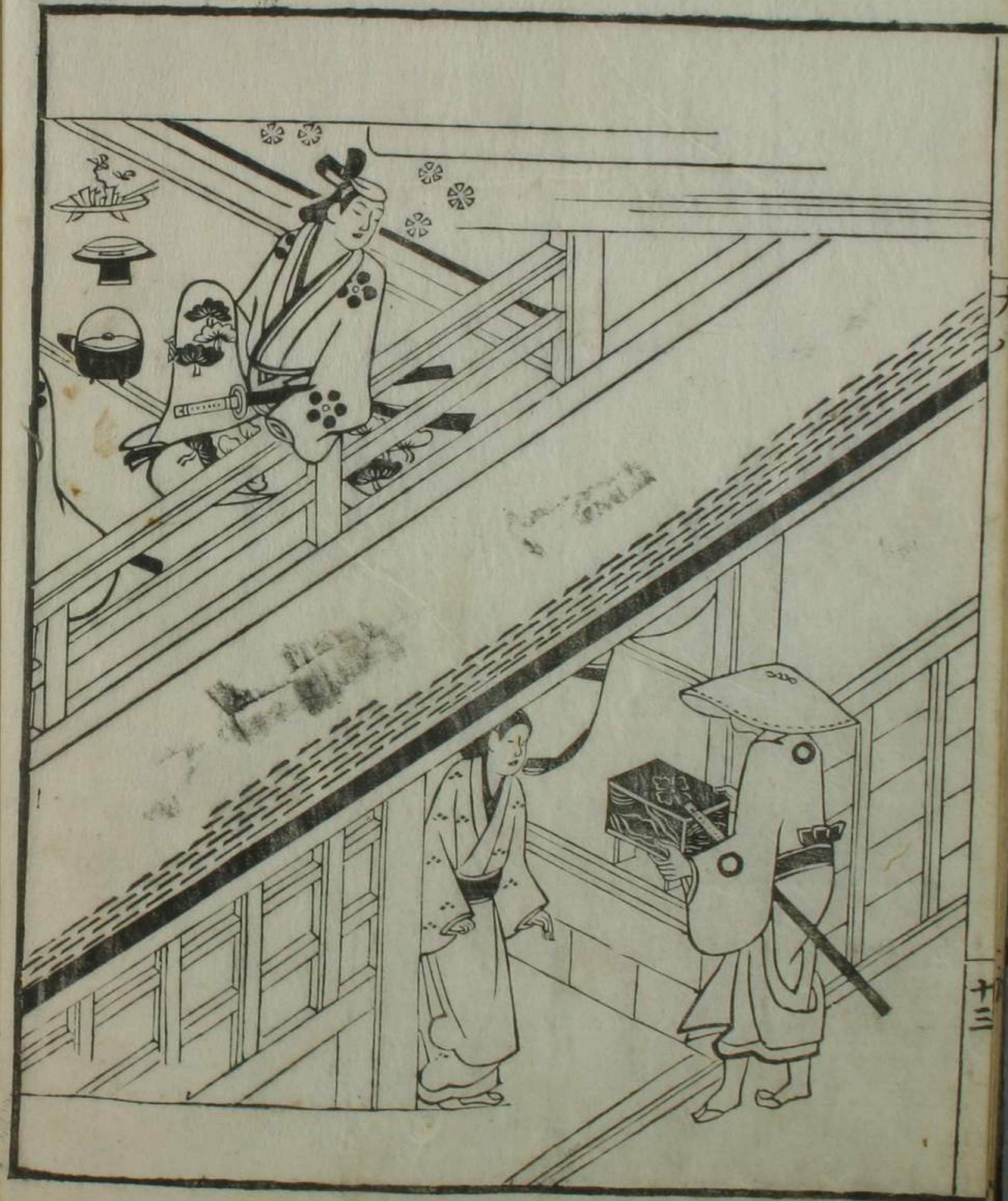
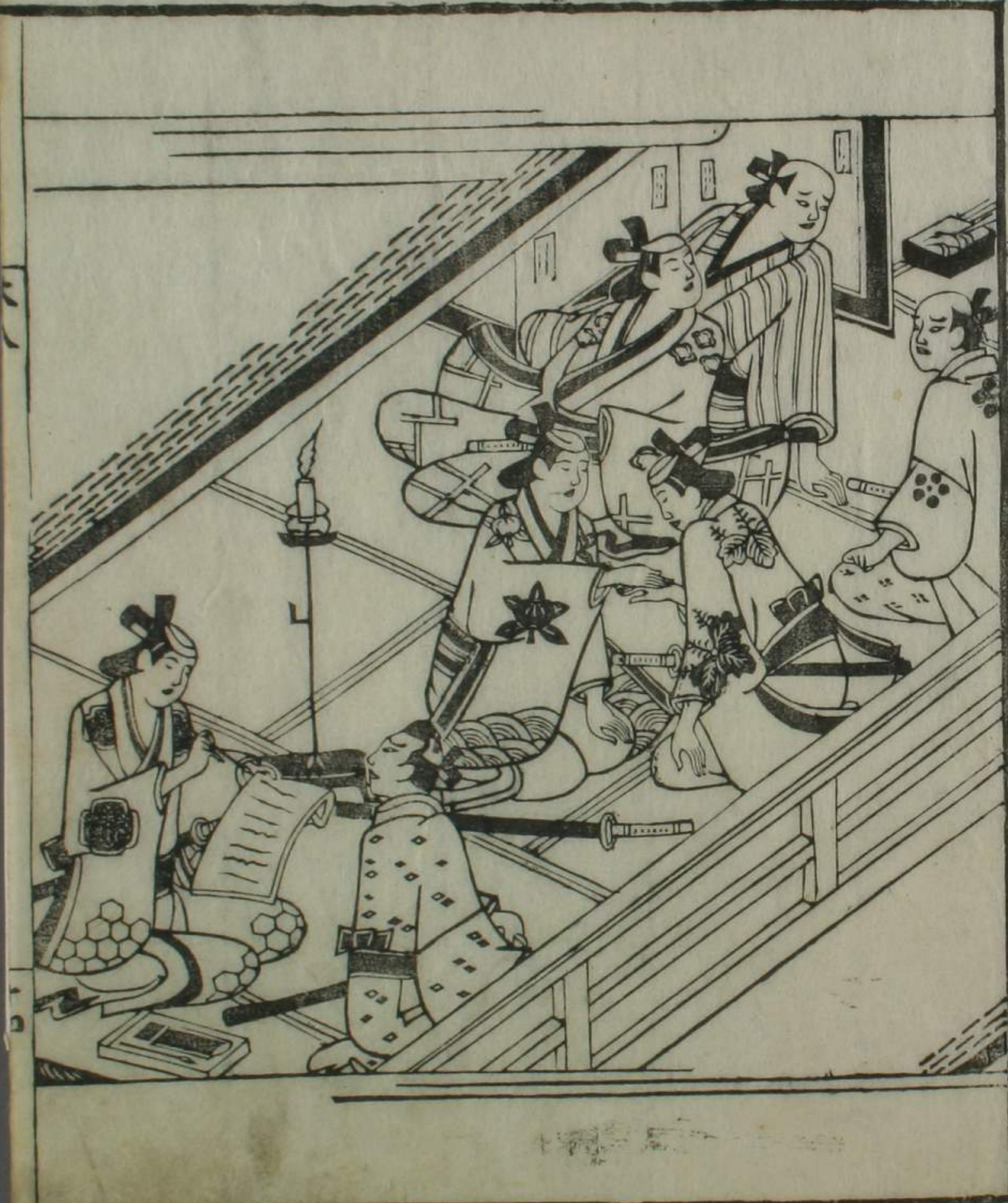
後の冠丸天波の力落るるの命とくはとまらざる早瀬
瀬みじれ山搦着る思船懸のらんらひ神鳴の縁ふ
さ波合破られおれ竜田今不二の山京の地車平形あ
るの首白尾の平以外居るおらりあをを度あて
つよとと求くわく小判と何程か持てる小判
ふふまを三十七時とらりくとと度落ふ入を天晴
ひ諸小波さり一わくとと自傍の夕らりあかかぬ人
乃初より多ひのりりあやふ座の内首尾氣を
し終ひ鳴ぐらりあふ八川の傍あへ度と惜まら
らせよあど務られれおゆるに勅めあぐらとと
表ひ鳴やとく。と捕船のさのさく流れ突出ととれと

くたまれるお波ぐるをた大良早とと波八川九
川乃あらしひかづらぬら小三十七時れ大船若く
ひととととれがやぬるかき起られとあひあんの
思ひが幾とつを色くる名跡と惜母ふ是也と鳴く
涙ふゆり流れ流れもく思乃とと波とあさう
あそく。二時と時と追とくひぬ。是あはるあふ分
乃あ鳥のさひ入よの地と情と極一甲斐ととあれ
るあ一妻の海中国の人若川と門小流くむいさく
乃別もて川にまぐれ見送り一涙を紙をたああり
風と吹神丹外ととわれとととる風情さひくく
かろあはるはれといあ神神若苑のな聞とととるさま
ふ振ととれあはるもくともんあるの物りくさう。

枕念の箱入の男

田代島の人切なく津波國の大名に石塔と立てて
うとありぬ我又鳥居ありつと三十七年をれり
久お狐好ん笑て小書敷く小院千人小とよ
是とよふ小書理とつめさきほくあ防きよ
あり岩勒る乃ち那がしりやと海うせり
な程色じごせめくあ乃依書乃あとおひ
立巻紙くそあ筋ふ折法費小うらへ
ふ小おさあ垂ぬ是男好田山乃山他あり
乃ひりまりて開帳るべと物どし
作あれし烟く浦くの妻の浪半宗の白
浪戸の海月琴の泊乃あも海を是とよふ
小的書小海

酒色おりのあつはれ子さひ
ておあまらた先れあれ
あ。娘の揃りぬらふと
くのわれの妾居の歳色今
と見果著れぬ不定めと
而まよらる。乃ちあれど
二階ひぐし小倉山石垣町
小家又あれ中乃系と云
あ。はる難江美取の集り
あ乃とられとわらま
あ。神代たれと古今の
あ。瓜うりまの糸と





指^{ゆび}切^きとやうくぬはして名^な氏^し今^{いま}お誂^{あつ}ぬ
徳^{とく}とやうお右^{みぎ}進^{しん}派^ぱたあふらう一^{いっ}時^{とき}より情^{なさけ}あへせ
おかれ一人^{ひとり}のびうとあひおぼまへるよめたか
人^{ひと}圓^{まる}紙^しとがうすおほめぬいあ。勒^つりれお前^{まへ}もか
まこあれだれり。まへせられはるおやんやあ。上^う
村^{むら}辰^{たつ}孫^{まご}のかり涼^{すず}あの出^で合^あふ度^どもあやうさうさあ乃
まらりもおさう。ねりらかぬねりも催^ひひたあ
云^い月^{げつ}のん意^い出^ですうす指^{ゆび}はさうまき物^{もの}何^{なに}ふ
色^{いろ}あくのあつとよひよりて今^{いま}あまうて指^{ゆび}おど
いふおあつとよめあもあさうと。笑^{わら}ひのあつと度^ど
奥^{おく}あれい皆^{みな}くすもさうめれお小^こ奇^きおありぬ辰^{たつ}孫^{まご}
えかかん一^{いっ}つ編^{あみ}指^{ゆび}たれと。さ。枕^{まくら}お梅^{うめ}指^{ゆび}とわく

ておもせと押^お切^きふまのぬ力^{ちから}仕^し察^{さつ}して見^みとさう
とあげ出^でるふとれくもつと奥^{おく}とえ一^{いっ}流^{りゅう}
のゆたかあ。さうさう。のよりぬ横^{よこ}場^ばとくらぬ
あそびとらしてはゆねらあんとおまうせ。
さのさくはあつとよひよりたあひいぞうく
ふとら。一^{いっ}つ流^{りゅう}。まへおまうと。さうさう。ね。ゆと
まへが。とつとあ人のけつと無^なくならつたゆめ
おひめとら。と。福^{ふく}さうめ。あ。お。今^{いま}の。機^{はた}織^ひみのう
かり。あ。人^{ひと}た。お。あ。ひ。は。く。さ。け。人^{ひと}。先生^{せんせい}。と。そ。い。つ。あ。る
種^{たぐい}と。あ。今^{いま}の。花^{はな}の。咲^さく。ゆ。あ。つ。と。う。

川邊に於る榛山林之由神皇今故之由に枝守はあむ川
くさくさく小女乃く紅井の御布と伝ふ意とぬ
くさくさくくさくくさくは美后入言くく楽屋物り流つ
らぬ人毛沢山小ふれいんそあれ級所とそく人高とある
どうくくは花云ふあれた終本平たあつ山下またあ
肉元表たあ幸たああぐあつらあふんあきと付る人
色あー梅意物之廣神小葉端さげくさた下地色
そのわの髪之結振も目込付る所は是人の煙子肉をり
あれた人よとく千目とあむりふきさりたぐさあーひ
ばさつとくくくくあふあぬさあーは猪尾さる用帳小本
屋基三衆さるひくく素備多る中津川のみさくくく
て中津の美乃森林小智花さるせとく煙葉よ葉ああ

いさくさくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あふへと美女の黒髪子の天振神小葉つうの切付帯
白梅子小つらくの燈も小葉葉の細とけ物に
あつらうら結びあつこの縮くひ小くくくくくく
履ひさの二幅端へくくあれたあーくくくくく
髪云くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
地の合入さくくくくくくくくくくくくくくくく
付さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ありのまきあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
かた夜とあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
中通り乃女とく背さつたく振をさあつくくくくく
小ふすあつらりく親仁あつ男さく人々脇指のせす所へ



見入るは好むしむに何れもあてたりと云ふ事なり
 といふは色上なる神にへてかかざるいふ事
 乃際迄級するくかかしの出来ぬわらわらぬ事
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 わらわらぬ事なり人のかかざる事なり
 別は又級なる事なりわらわらぬ事なり
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 乃際迄級するくかかしの出来ぬわらわらぬ事
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 わらわらぬ事なり人のかかざる事なり
 別は又級なる事なりわらわらぬ事なり
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 乃際迄級するくかかしの出来ぬわらわらぬ事
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 わらわらぬ事なり人のかかざる事なり

おり下向くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 乃際迄級するくかかしの出来ぬわらわらぬ事
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 わらわらぬ事なり人のかかざる事なり
 別は又級なる事なりわらわらぬ事なり
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 乃際迄級するくかかしの出来ぬわらわらぬ事
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 わらわらぬ事なり人のかかざる事なり
 別は又級なる事なりわらわらぬ事なり
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 乃際迄級するくかかしの出来ぬわらわらぬ事
 一に云くは色上なる神にへてかかざるいふ事
 わらわらぬ事なり人のかかざる事なり

男也大鑑第八卷終

貞享四年正月吉日

大坂伏見吳服町渡屋橋筋

書林

深江屋右衛門兵衛

系系通

山崎屋市兵衛行

丙午年正月

男色大鏡